台湾日本語言文藝研究学会

第十四回定例学会

日本言語文化研究国際学術シンポジウム

日本研究の多様化

研 討 會 手 冊

一〇三年十二月六日

慶祝長榮大學創校 21 週年校慶

台湾日本語言文藝研究学会第 14 回定例学会

日本言語・文芸・文化研究学会国際学術シンポジウム

テーマ:日本研究の多様化—教育現場への期待

日時:2014 年 12 月 6 日(土)　場所:長榮大学第一教学ビル3F視聴センター

主催:台灣日本語言文藝研究學會、長榮大學應用日語研究所・應用日語學系

後援:長榮大學、財團法人亞太文經學術基金會

8:30—9:00	受　付
9:00—9:30	開会の辞:台湾日本語言文藝研究学会　謝逸朗名誉理事長　／陳俊郎理事長
9:30—11:00	講演:橋谷英子先生(新潟大学人文学部教授) 「雪国新潟の昔話—長岡市小国町での聞き取り調査から」
11:00—11:30	会員大会
11:30—13:00	昼　食

研究発表:20 分 質疑応答:10 分	＜第一会場　日本語学＞ 司会:武知正晃（台灣首府大學應用外語系助理教授）	＜第二会場　日本語教育・語学＞ 司会:楊淑雲（中華大學應用日語學系副教授）
13:00 | 13:30	蘇鈺甯 (長榮大學應用日語學系助理教授) 「身体語『腕』を用いた表現の意味分布調査」	金秀英　高柳直彌（實踐大學高雄校區應用日文學系助理教授） 「語彙学習におけるインターネットの活用—台湾人日本語学習者のカタカナ語学習を例に—」
13:30 | 14:00	黄愛玲（高雄第一科技大學應用日語學系助理教授） 「中国語『曬』の意味拡張に関する一考察」	蘇雅玲（長榮大學應用日語學系助理教授）「台湾人日本語学習者によるイ形容詞およびナ形容詞の習得過程」
14:00 | 14:30	呉幸芬（長榮大學應用日語學系助理教授） 「台湾閩南語語彙と日本語語彙における同形漢字語の意味と発音に関する研究」	謝君慈(南榮科技大學應用日語學系助理教授)「景観写真による言語描写法からみた幼児の知覚環境形成—台湾台南市新化区の中心集落における6歳女児Ｌと5歳男児Ｌの比較を通して—」
30 分	休　憩	
14:30 | 15:00	施淑惠（大葉大学應用日語學系助理教授） 「日本語・台閩語における連語の対照研究—「移し変えの結び付き(搬徙組合)」の移行関係についての考察—」	黒瀬恵美（長榮大學應用日語學系助理教授） 「待遇表現としての日本語の敬称—『さん』『ちゃん』『君(くん)』を中心に—」
15:30 | 16:00	何志明（香港中文大學日本研究學系） 「日本語複合動詞の使用実態調査—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に—」	林志原（義守大學應用日語學系助理教授） 「意味の拡張と文法的カテゴリーの変更—現代日本語の『カラ』を中心として—」

研究発表:20 分 質疑応答:10 分	＜第三会場　日本文学・文化＞ 司会:楊錦昌 (輔仁大學日文學系副教授)	＜第四会場　日本産業・文化＞ 司会:篠原信行 (元台灣大學日文系講師)	＜第五会場　日本産業・観光＞ 司会:莊幸美 (興國管理學院企管系助理教授)
13:00 | 13:30	石井周 (長榮大學應用日語學系) 「岡本韋庵『台湾遊記』について」	薄葉祐子（東北工業大学客員研究員） 「日本国東北地方における地方銀行の女性活用推進施策」	江旭本（長榮大學應用日語學系助理教授）「1930 年代の台南における台日商業の発展」
13:30 | 14:00	兒島慶治（香港中文大學日本研究學科非常勤講師）「『日本』は何故『ニホン』と読む事ができるのか？」	渡部順一（東北工業大学経営コミュニケーション学科教授）「東日本大震災後の日本国東北地方における第一次産業の再生」	堀高志（台湾首府大學應用外語學系日語組助理教授）「日台企業のアライアンスにおけるアーキテクチャ融合の可能性」
14:00 | 14:30	歐薇蘋 (長榮大學應用日語學系助理教授) 「『借用漢字』の台湾文化への影響について」	王珍妮（國立高雄餐旅大學應用日語學系副教授） 「気遣い/心遣いと気配り/心配りの一考察」	謝欣純（長榮大學應用日語學系講師） 「從生態旅遊角度探討『区域』『地区』『ゾーン』『エリア』定義—利用長榮大學二仁溪環境教育園區訓練日文口語導覽為例」
30 分	休　憩		
14:30 | 15:00	李守愛 (義守大學應用日語學系副教授) 「漢語伝入と日本言語への影響」	黄士瑩（長榮大學應用日語學系助理教授）「潜在的な意見不一致における男女差—台湾人と日本人を対象に—」	蔡嘉琪(興國管理學院應用日語學系) 「レトロ探しの旅—台湾で懐かしい日本に出会う—」
15:30 | 16:00	林憲宏 (長榮大學應用日語學系助理教授) 「關於遠藤周作的《沈黙》」	辜玉茹（中國医薬大學通識教育中心副教授）「丹波康頼著『康頼本草』の本質—薬用植物『和名』の研究を中心に—」	劉伯雯(国立高雄第一科技大學應用日語學系)「日本の鉄道企業におけるランドマーク建設 近鉄 あべのハルカスを例として」
18:00	理事監事会議		

連絡:長榮大學應用日語學系　(06)278-5123(内線 4251)　japanese@mail.cjcu.edu.tw

信箱:台南郵局 1322 號信箱

台湾日本語言文藝研究学会第十四回定例学会
日本言語文化研究国際学術シンポジウム
日本研究の多様化—教育現場への期待

目　　錄

壹、演講

新潟の昔話—新潟県小国町（長岡市）を例として…… 橋谷(馬場)英子教授… p.1

貳、分科發表

一、日本語學（第一會場 1301 教室）

1. 身体語「腕」を用いた表現の意味分布調査…… 蘇　鈺甯…… p.17
2. 中国語「曬」と日本語「さらす」の対照研究…… 黄　愛玲…… p.31
3. 台湾閩南語語彙と日本語語彙における同形漢字語の意味と発音に関する研究…… 吳　幸芬…… p.37
4. 日本語・台閩語における連語の対照研究
—「移し変えの結び付き（搬徙組合）」の移行関係についての考察—… 施　淑惠…… p.43
5. 日本語複合動詞の使用実態調査
—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に—…… 何　志明…… p.54

二、日本語教育・語學（第二會場 1303 教室）

1. 台湾人日本語学習者のカタカナ語学習の一考察
—語彙学習におけるインターネットの活用—…… 金秀英、高柳直彌… p.68
2. 台湾人日本語学習者によるイ形容詞およびナ形容詞の習得過程…… 蘇　雅玲…… p.87
3. 景観写真による言語描写法からみた幼児の知覚環境形成—台湾台南市新化区
の中心集落における6歳女児Lと5歳男児Lの比較を通して—…… 謝　君慈…… p.93
4. 待遇表現としての日本語の敬称—「さん」「ちゃん」「君(くん)」を中心に—…… 黒瀬恵美…… p.117
5. 意味の拡張と文法的カテゴリーの変更—現代日本語の「カラ」を中心として…… 林　志原…… p.124

三、日本語文學・文化（第三會場 1304 教室）

1. 岡本韋庵「台湾遊記」について…… 石井　周…… p.134
2. 「日本」は何故「ニホン」と読む事ができるのか？…… 兒島慶治…… p.142
3. 「借用漢字」の台湾文化への影響について…… 歐　薇蘋…… p.154
4. 漢語伝入と日本言語への影響…… 李　守愛…… p.160
5. 關於遠藤周作的《沈黙》…… 林　憲宏…… p.170

四、日本産業・文化（第四會場 1308 教室）

1. 日本の女性活用推進施策の事例報告
—東北地方の地方銀行6社における女性活用推進施策を事例として—…… 薄葉祐子…… p. 178
2. 東日本大震災後の日本国東北地方における第一次産業の再生…… 渡部順一…… p. 194
3. 気遣い/心遣いと気配り/心配りの一考察…… 王 珍妮…… p. 215
4. 潜在的な意見不一致における男女差—台湾人と日本人を対象に—…… 黄 士瑩…… p. 231
5. 丹波康頼著『康頼本草』の本質—藥用植物「和名」の研究を中心に—…… 辜 玉茹…… p. 239

五、日本産業・觀光（第五會場 1201 教室）

1. 1930 年代の台南における台日商業の発展…… 江 旭本…… p. 248
2. 国際分業と企業成長の論理 —日台企業連携の可能性と課題—…… 堀 高志…… p. 258
3. 從生態旅遊角度探討「区域」「地区」「ゾーン」「エリア」定義
—利用長榮大學二仁溪環境教育園區訓練日文口語導覽為例…… 謝 欣純…… p. 267
4. レトロ探しの旅—台湾で懐かしい日本に出会う—…… 蔡 嘉琪…… p. 273
5. 日本の鉄道企業におけるランドマーク建設
近鉄あべのハルカスを例として…… 劉 伯雯…… p. 283

日本語複合動詞の使用実態調査
—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に—

何　志明
香港中文大学日本研究学科

1. はじめに

何(2014a, 2014b)は、大規模コーパス(大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所が開発した現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の「中納言」)及び現在日本の小中高校で使用されている国語教科書を通して現代日本語複合動詞の使用について調査を行い，日本語母語話者なら子供から大人まで使用するというだけでなく，その中でもとりわけ出現頻度が高いものを抽出することができた。使用頻度の高い複合動詞について、コーパスから得たデータと実際日本語母語話者が日常的に使っているもの(使用意識)の間に相違があるかどうかを検証するため、さらなる調査(本調査)を行う必要があるが、その調査の妥当性を検証するために予備調査を実施する。

2. 先行研究

2.1 永田・茂木(2007:116-109)

接続助詞「けど」、「けれど」、「けれども」、「けども」、「が」の使い分けについて、日本語母語話者の意識調査の結果とコーパスのデータに基づいて考察を行った。

日本語母語話者の調査：国立大学 1 年生 20 名
コーパスの調査：談話資料『日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ))』(国立国語研究所、情報通信研究機構、東京工業大学)

<u>調査結果</u>
日本語母語話者の意識：
【書き言葉的(1 点)ー話し言葉的(5 点)】

「けど」:4.85 点
「けれど」:3.2 点
「けれども」:1.65 点
「けども」:3.35 点
「が」:2.16 点

【場の改まり度:高(1 点)ー低(5 点)】
「けど」:4.84 点
「けれど」:2.85 点
「けれども」:1.6 点
「けども」:2.85 点
「が」:2 点

【前接要素「だーです」による自然さ:高(1 点)ー低(5 点)】

「だけど」:1.15 点	「ですけど」:1.4 点
「だけれど」:1.9 点	「ですけれど」:2.05 点
「だけれども」:3.1 点	「ですけれども」:2.85 点
「だけども」:3.55 点	「ですけども」:2.9 点
「だが」:3.11 点	「ですが」:1.4 点

コーパス CSJ の場合:

a 「が」:書き言葉的、「けど」:話し言葉的
b 「けれども」「が」:改まり度が高い談話
「けど」:改まり度が低い談話
改まり度:「が」>「けれども」
c 「けれど」:講演での使用が低い
「けれど」「けども」:談話の種類や改まり度以外の要因が関わる可能性がある
d 「けど」「けれど」「けれども」「けども」:談話の改まり度と文の改まり度は対応する傾向にある。「が」は「です」系との結びつきが強い

母語話者の意識 vs. コーパス CSJ:
概ね一致するが、異なる点もある。

a 意識調査:「けれど」のほうがより書き言葉的

コーパス CSJ:「が」のほうがより書き言葉的

b 意識調査:「けれども」の改まり度が高い
コーパス CSJ:「が」の改まり度が高い

c 意識調査
「けど」「けれど」:前接要素のスタイルに関わらず自然
「が」:より改まり度が高い前接要素(です)と結合した場合
なら自然
「けれども」「けども」:どちらも言えないもの
コーパス CSJ:
談話の改まり度に応じた前接要素と結合する傾向が
見られる

2.2 森(2011: 319-341)

多くの日本語教科書では着点を示す「に」・「へ」を提示しているが、「へ」を導入するのは日本語教育の勝手な都合ではないか。また、そもそも現代において日本語母語話者は「へ」を使用しているか。日本語教科書調査、現代語大規模コーパス BCCWJ 2009 の調査、学習者コーパス調査、言語使用調査で検証した。

<u>調査結果</u>

a どの調査でも「に」より「へ」のほうが圧倒的に使用が少ない。
b 少なくとも初級では「に」と「へ」をアウトプット(話す・書く)で
使い分けられるように教える必要がない。

結論:母語話者の意識とコーパスによるデータの間にずれが生じる
可能性がある。

3. 予備調査の手順

3.1 調査協力者

東京都内ある私立大学の教員、職員、大学院生(計 10 名)

年齢: 20～25 歳 (2 名)
26～30 歳 (2 名)
31～35 歳 (3 名)

41～45 歳 (2 名)
50～55 歳 (1 名)

※回答の追跡を可能にするため、記名調査にした。

3.2 調査期間

2013 年 7 月 11 日(木)、2013 年 7 月 18 日(木)、2013 年 7 月 25 日(木)
計 3 回実施

3.3 予備調査用の複合動詞

本調査を実施する前に、何(2014a)から得た使用頻度の高い複合動詞を(中納言コーパスより)約 200 語から 20 語選出した。本調査の妥当性を検証する目的なので、使用頻度の比較的高いものも比較的低いものも含まれている。

3.4 予備調査の項目

<u>第 1 部と第 2 部の 2 部構成</u>

第 1 部:協力者のお名前と年齢層
第 2 部:協力者の複合動詞の使用意識調査

アンケートのサンプル

【第２部】

下記のそれぞれの質問に対して、一番あなたの意見に近いと思う番号を丸で囲んでください。

I. 下記の複合動詞について、あなたの使用状況を教えてください。5～1 について、あなたの意見に最も合うものを<u>1つだけ</u>選び、その番号を丸で囲んでください。

	よく使う	使う	時々使う	あまり使わない	使わない
01 受け入れる	5	4	3	2	1
02 取り上げる	5	4	3	2	1

II. 質問 I において、日常生活のどのような場面で使うかを教えてください。当てはまるものに「○」、当てはまらないものに「×」をご記入ください。

<u>(*複数回答可)</u>

	a. 書くとき	b. 話すとき
01 受け入れる		
02 取り上げる		

3.5 アンケート用紙の内容

協力者に複合動詞の提示順位を気づかれないように、選出された 20 語の複合動詞の提示順序を毎回変更し、アンケート用紙を作成した。

複合動詞(順位)	1回目	2回目	3回目
受け入れる(7)	01	20	15
取り上げる(10)	02	12	09
振り返る(12)	03	11	19
引っ張る(19)	04	15	12
取り入れる(22)	05	17	10
引き起こす(30)	06	10	01
受け止める(34)	07	18	11
持ち込む(40)	08	05	17
見守る(45)	09	16	02
押し付ける(50)	10	02	16
乗り出す(52)	11	03	07
取り扱う(56)	12	19	04
思い込む(64)	13	09	20
結び付ける(67)	14	07	06
持ち出す(75)	15	04	08
組み込む(79)	16	13	03
言い換える(83)	17	08	05
立ち止まる(90)	18	14	13
呼び出す(93)	19	06	14
思い浮かべる(99)	20	01	18

4. 予備調査の結果

回収したアンケート用紙のデータを集計し、協力者の回答の変化を考察する。

4.1　1回目と2回目のアンケート調査の比較

【一致している割合】

複合動詞	使用状況	a. 書くとき	b. 話すとき
受け入れる	40%	100%	70%
取り上げる	90%	80%	100%
振り返る	60%	80%	80%
引っ張る	80%	90%	90%
取り入れる	30%	80%	70%
引き起こす	40%	90%	70%
受け止める	50%	80%	60%
持ち込む	60%	100%	100%
見守る	20%	80%	90%
押し付ける	60%	80%	80%
乗り出す	50%	90%	80%
取り扱う	40%	90%	80%
思い込む	60%	80%	100%
結び付ける	70%	70%	70%
持ち出す	40%	100%	90%
組み込む	20%	80%	80%
言い換える	60%	70%	70%
立ち止まる	50%	70%	90%
呼び出す	70%	80%	100%
思い浮かべる	40%	100%	90%
全体	**51.5%**	**84.5%**	**83%**

4.2　2回目と3回目のアンケート調査の比較

【一致している割合】

複合動詞	使用状況	a. 書くとき	b. 話すとき
受け入れる	70%	100%	70%
取り上げる	80%	90%	80%
振り返る	60%	70%	90%
引っ張る	70%	60%	90%
取り入れる	60%	80%	70%
引き起こす	60%	80%	70%
受け止める	60%	70%	70%
持ち込む	60%	100%	100%
見守る	50%	80%	80%
押し付ける	60%	70%	60%
乗り出す	60%	60%	80%
取り扱う	50%	90%	90%
思い込む	70%	90%	100%
結び付ける	70%	90%	90%
持ち出す	50%	100%	90%
組み込む	30%	80%	80%
言い換える	90%	80%	80%
立ち止まる	70%	80%	100%
呼び出す	80%	70%	90%
思い浮かべる	50%	100%	90%
全体	**62.5%**	**82%**	**83.5%**

4.3　1回目と3回目のアンケート調査の比較

【一致している割合】

複合動詞	使用状況	a. 書くとき	b. 話すとき
受け入れる	70%	100%	80%
取り上げる	90%	90%	80%
振り返る	80%	90%	70%
引っ張る	50%	70%	80%
取り入れる	50%	100%	100%
引き起こす	50%	70%	100%
受け止める	60%	60%	70%
持ち込む	80%	100%	100%
見守る	60%	60%	70%
押し付ける	60%	90%	80%
乗り出す	50%	70%	100%
取り扱う	70%	100%	90%
思い込む	60%	70%	100%
結び付ける	50%	80%	60%
持ち出す	60%	100%	100%
組み込む	40%	100%	100%
言い換える	50%	70%	70%
立ち止まる	60%	90%	90%
呼び出す	60%	90%	90%
思い浮かべる	30%	100%	80%
全体	**59%**	**85%**	**85.5%**

4.4　1回目、2回目、3回目のアンケート調査の比較

【一致している割合】

複合動詞	使用状況	a. 書くとき	b. 話すとき
受け入れる	40%	100%	60%
取り上げる	80%	80%	80%
振り返る	50%	70%	70%
引っ張る	50%	60%	80%
取り入れる	20%	80%	70%
引き起こす	30%	70%	70%
受け止める	40%	60%	50%
持ち込む	50%	100%	100%
見守る	20%	60%	70%
押し付ける	50%	70%	60%
乗り出す	40%	60%	80%
取り扱う	30%	90%	80%
思い込む	50%	70%	100%
結び付ける	50%	70%	60%
持ち出す	30%	100%	90%
組み込む	0%	70%	80%
言い換える	50%	60%	60%
立ち止まる	40%	70%	90%
呼び出す	60%	70%	90%
思い浮かべる	20%	100%	80%
全体	**40%**	**75.5%**	**76%**

4.5　回答のずれ

【合計１レベルの差(例:１回目－5、２回目－4、３回目－4)】

複合動詞	使用状況(a)	【一致している割合】(b)	(a)+(b)
受け入れる	50%	(受け入れる　40%)	90%
取り上げる	20%	(取り上げる　80%)	100%
振り返る	50%	(振り返る　50%)	100%
引っ張る	50%	(引っ張る　50%)	100%
取り入れる	80%	(取り入れる　20%)	100%
引き起こす	60%	(引き起こす　30%)	90%
受け止める	50%	(受け止める　40%)	90%
持ち込む	50%	(持ち込む　50%)	100%
見守る	70%	(見守る　20%)	90%
押し付ける	10%	(押し付ける　50%)	60%
乗り出す	40%	(乗り出す　40%)	80%
取り扱う	70%	(取り扱う　30%)	100%
思い込む	40%	(思い込む　50%)	90%
結び付ける	40%	(結び付ける　50%)	90%
持ち出す	60%	(持ち出す　30%)	90%
組み込む	90%	(組み込む　0%)	90%
言い換える	40%	(言い換える　50%)	90%
立ち止まる	50%	(立ち止まる　40%)	90%
呼び出す	30%	(呼び出す　60%)	90%
思い浮かべる	60%	(思い浮かべる　20%)	80%
全体	**50.5%**	**40%**	**90.5%**

【それぞれのずれの分布(5-4, 4-3, 3-2, 2-1)】

複合動詞	5-4	4-3	3-2	2-1	(合計)
受け入れる	30%	10%	10%	0%	(50%)
取り上げる	10%	0%	10%	0%	(20%)
振り返る	20%	20%	10%	0%	(50%)
引っ張る	40%	10%	0%	0%	(50%)
取り入れる	40%	20%	20%	0%	(80%)
引き起こす	10%	20%	30%	0%	(60%)
受け止める	40%	10%	0%	0%	(50%)
持ち込む	30%	10%	10%	0%	(50%)
見守る	20%	40%	10%	0%	(70%)
押し付ける	10%	0%	0%	0%	(10%)
乗り出す	10%	10%	20%	0%	(40%)
取り扱う	30%	20%	20%	0%	(70%)
思い込む	20%	20%	0%	0%	(40%)
結び付ける	20%	0%	20%	0%	(40%)
持ち出す	30%	10%	20%	0%	(60%)
組み込む	10%	40%	40%	0%	(90%)
言い換える	10%	30%	0%	0%	(40%)
立ち止まる	20%	10%	20%	0%	(50%)
呼び出す	20%	10%	0%	0%	(30%)
思い浮かべる	20%	20%	20%	0%	(60%)
全体	**22%**	**15%**	**13%**	**0%**	

5. 結果の分析

複合動詞の使用状況(5 段階評価):信頼性が高いとは言いがたい
(※協力者の回答からある程度の一致性が見られる)

複合動詞をどのような時に使うか:比較的安定した結果が得られた

6. おわりに

本発表では、意識調査の可能性と限界を考察した。
(言語使用調査は万能であるわけではない。コーパスと言語使用調査、それぞれの特性と限界を知り、相互補完するように使用すべきである(森(2011:326)))

今後の課題:
本発表の結果を基礎に踏まえ、日本語母語話者の複合動詞の使用意識を反映する調査方法を構築する。

Acknowledgment (謝辞)
This research is supported by the "General Research Fund for 2011/2012", Research Grants Council, Hong Kong (Project title : "The Usage of Japanese Compound Verbs", Project code : 445811).
本研究は、Research Grants Council, Hong Kong による"General Research Fund for 2011/2012"研究助成金(課題名称:"The Usage of Japanese Compound Verbs"、課題番号:445811)を受けて実施したものです。

参考文献

1 何志明(2012)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び中上級日本語教科書における複合動詞の出現頻度」『日本語／日本語教育研究』vol.3, pp.261－276. 東京:日本語／日本語教育研究會

2 何志明(2014a)「日本語母語話者はどのような複合動詞をよく使

用しているか—大規模コーパスと国語教科書の調査結果を通して—」『2014 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.309－314. 東京：公益社団法人日本語教育学会

3 何志明(2014b)「日本語複合動詞のコロケーション—大規模コーパスの調査結果を通して—」『韓國日本語學會第 30 回國際學術發表大會予稿集』, pp.61－80. ソウル：韓國日本語學會

4 永田良太・茂木俊伸(2007)「接続助詞のスタイルをどう捉えるか：母語話者の意識調査とコーパスの分析から」『語文と教育』21, pp. 116－109. 鳴門教育大学

5 森篤嗣(2011)「着点を表す助詞「に」と「へ」における日本語母語話者の言語使用について」森篤嗣・庵功雄(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp. 319－341, ひつじ書房